食R事業・新潮流

11年7月、本社敷地内に有機性廃棄物の燃料化施設「ひょうご再資源化センター」を新設し、食品リサイクル事業に参入した。

新施設の建築面積は約1914平方㍍で、処理能力は日量約80立方㍍（8時間稼働）となっている。処理方法には「新型油温減圧脱水方式」を採用し、約

油の代替として、製鉄所や火力発電所、セメント工場等へ供給していく。

同事業は、環境省の10年度「廃棄物処理施設における温暖化対策事業」に採択され、総工費約15億円のうち約2億円を補助金で賄ったという。今回の新規参入の決め手や経緯について、小林会長に話を聞いた。

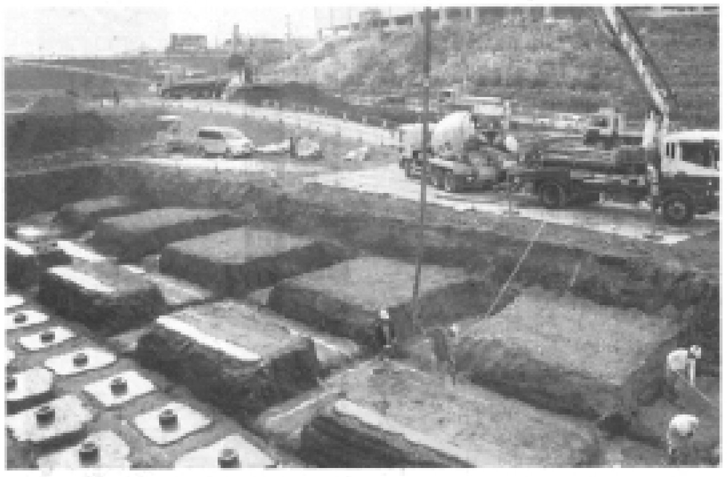
新設された「ひょうご再資源化センター」（フジイ）

経営者の想い

――御社は1964年の創業以来、し尿やごみの収集運搬業、浄化槽などの維持管理業務に取り組んで来られましたが、今回、有機性廃棄物のリサイクル事業に参入された理由を教えてください。

小林　カナダを10年ぶりに訪れた際、万年氷が融けて大幅に後退しているのを目の当たりにし、地球温暖化の進行に危機感を覚えました。廃棄物を扱う業者として何か貢献できることはないかと考えたのが始まりです。

そこで数年来、「廃棄物は資源」という観点で徹底した分別収集を行い、焼却・埋め立てに回る廃棄物を大幅に減少させてきました。最後に残ったのが、容器包装リサイクル法による分別から外れた包装ごみと動植物由来の有機性廃棄物だったの


東京都八王子市内で昨年10月に着工（イズミ環境）

は、食品廃棄物と剪定枝から堆肥を製造する「（仮称）八王子バイオマス・エコセンター」（東京都八王子市）の建設に着工した。処理能力は1日当たり80㌧（8時間稼働）という都内最大級で、12年3月までに完成、試運転期間を経て7月開設を目指す。

同社は、親会社の出水建設（瑞穂町）が都内で生ごみリサイクル施設の開発事業に携わったのをきっかけに、

に発足し、施設の設置に向けて準備を進めてきた。建設中の施設は、日本システム化研が特許を持つ「オズマニックシステム」を核に構

棟、熟成・製品棟、剪定枝処理棟、事務所棟の4棟を設置する。

受け入れ品目には、事業系一廃の生ごみと剪定枝、産廃の動植物

円。設備部分については、農水省の10年度「資源循環型地域活力向上対策補助事業」の枠で、8億7273万円の補助を得ている。

久保クリーン興産

日量100m^3堆肥化施設を稼働

汚泥中心に回収目指す

収集運搬業などを行う久保クリーン興産（兵庫県尼崎市、久保建夫会長）は11年10月、堆肥化施設「環境ワクチンセンター東条事業所」（同県加東市）を完成させて許可を取得し、有機性汚泥や食品残さのリサイクル事業に参入した。当面は、大手食品会社等を対象に営業を展開。焼却ごみ削減のため、将来的には各自治体への普及を目指す。

新施設の総工費は約12億円。建築面積は約1万6500平方㍍で、処理能力は1日当たり100立方㍍（24時間稼働）となっている。幅約50×長さ約100

を促進させて約45日間で堆肥化する仕組みとなっている。

同社は、廃棄物の焼却処分時に出るCO²を削減する方法として同システムに着目し、5年ほど前から計画を進めてきた。この先数年は、すべての処理物を戻し堆肥に活用していく方針。都市部や高速道路のインターチェンジに隣接するという立地条件を強みに、有機性汚泥を中心に回収を進めていく。

新施設の全景（久保クリーン興産）

玉井道路

総合建設業から食R事業に参入

飼料化設備導入し検証へ

総合建設業の玉井道路（京都市、玉井政弘社長）は、12年1月をめどに、同府城陽市で液体飼料化設備を導入して食品リサイクルと養豚業に着手する。当面は、試験として1日当たり数㌧程度の食品残さを飼料化。16頭の豚を肥育して肉質を検証し、本格稼働に向けた体制を整える。

同事業は、国交省の「建設企業の連携によるフロンティア事業」に選定されたもので、実証試験費のうち1000万円を補助金で賄う。近年、整備不足による荒廃が深刻化している竹を豚の敷料に活用する計画。竹の有効利用だけでなく、雇用創出にもつながるとして評価を受けた。

同社が展開を予定する飲食関連事業で、豚肉を提供したいと考えたことがきっかけとなった。将来的には肉のブランド化や、敷料を堆肥化して農作物の栽培を行うなど、地産地消型の安心・安全な食物提供につなげていきたいとする。

中國開發

養豚と併せ食R事業開始

山林チップを敷料に活用

産廃処理業の中國開發（広島県府中市、池田博道社長）は11年6月から、豚舎を併設した飼料化工場「神石エコファーム」（同県神石高原町）の稼働を開始し、食品リサイクル・養豚事業に新規参入した。同福山市内やその近郊のコンビニ工場、パン工場などから食品残さを回収して液状（リキッド）飼料化し、養豚に活用する。

新施設は県から1800万円の補助を受け、約1億円をかけて建設。敷地は約2万平方㍍で、うち豚舎は1800平方㍍となっている。飼料化工場には、源麹研究所（鹿児島県霧島市）の「GENリキッドフィールドシステム」を採用。23㌧タイプの発酵タンク2基のほか、投入ホッパーや分離・破砕機、殺菌装置、貯蔵タンクなどを導入した。新豚舎では現在、800～900頭の豚を肥育している。

新事業は09年から準備を進めてきたもの。同社は山林伐採時などに出る未利用材をチップ化する事業を展開しており、それが家畜の敷料に有効であることなどから今回の事業につながった。同社は新事業の中で、源麹研究所の食品リサイクル技術と山林チップを活用した敷料を実証し、地域資源循環型の事業構築を目指す。

発酵タンク（中國開發）

棄物でも、処理・活用の方法はさまざま。こ

ですから。ただ、どういう風に処理している

ムズ）

の農園に施用しており、10年から本格的に

テム
スクラバで
ど発生しない
し下さい。
〒421-0526　静岡県牧野原市大沢1052-1
TEL 0548-52-1547　FAX 0548-52-4880

http://www.eco-cle.jp
循環型社会を目指して
新しい「生ゴミ」のリサイクルを提案します。